

英語コーパス学会第15回大会

日時 2000年4月22日(土)

会場 山陽学園大学 (〒703-8501 岡山市平井 1-14-1 TEL:086-272-6254)

(JR 岡山駅バスターミナル「8番のりば」より両備バスの天満屋・山陽大学経由「新岡山港」, 「桑野営業所」, 「ふれあいセンター」行きのいずれかに乗車。山陽学園大学・短大前にて下車, 徒歩3分。CONF_15.files¥www.sguc.ac.jp 参照。地図はCONF_15.files¥www.sguc.ac.jp/intro/map/index.html。バス案内はCONF_15.files¥www.sguc.ac.jp/intro/bus/index.html。)

ワークショップ 10:30-12:00

《コーパス研究のための初歩の統計: Excelによるカイ自乗検定》

講師 徳島大学 中村 純作

先着 30名(予定) 参加費 会員無料・非会員1,000円 (申し込みは電子メール・郵便で事務局まで)

-->梗概

受付開始 12:30

開 会 13:00

1. 会長挨拶 大東文化大学 齊藤 俊雄
2. 会場校挨拶 山陽学園大学学長 秋山 和夫
3. 2000年度総会
4. その他

研究発表 13:30-15:00

司会 香川大学 永尾 智 追手門学院大
学 丸谷 満男

1. 古ノルド語神話文献資料コーパスの活用

大阪大学 堀

井 祐介

-->梗概

2. 英語テキストにおける母語話者と日本人英語学習者のトピック関連語の反復パターン

の比較

東京大学総合文化研究科言語情報科学博士課程

大谷 啓明

-->梗概

3. 動詞形成接辞-ize, -ify, -ate の付加における異形態の選択と音韻論的制約について

高知女子大学 五百藏 高

浩

-->梗概

〈休憩 15:00-15:15〉

シンポジウム 15:15-17:15

Longman Grammar of Spoken and Written English を読む

司会 京都外国語

大学 赤野 一郎

「全体を概観して」

講師 京都外国語大学

赤野 一郎

-->梗概

「文法論の視点から」

講師 椋山女学園大学

深谷 輝彦

-->梗概

「語法研究・辞書学の視点から」

講師 島根大学

井上 永幸

-->梗概

「英語教育の視点から」

講師 岡山朝日高等学校

鷹家 秀史

講師 高梁工

業高等学校 須賀 廣

-->梗概

閉会の辞

山陽学園大学

能登原 昭夫

《懇親会 17:45-19:30 山陽学園創立 110 周年記念館ドムス 会費 4,000 円》
司会 山陽学園大学 中野 香

英語コーパス学会 (Japan Association for English Corpus Studies)
会長 斎藤俊雄

事務局 770-8502 徳島市南常三島町 1 - 1 徳島大学総合科学部 中村純作研究室

TEL 0886-56-7129 郵便振替口座 00940-5-250586 (英語コーパス学会)

E-mail: (E-mail address deleted)

URL [../index.html](#)

◆ 大会当日、入会受付もいたしますので、お誘い合わせの上ご参加下さい (年会費 一般 5,000 円 学生 4,000 円)。また「当日会員」としての参加も受け付けております(1,000 円)。

英語コーパス学会第 15 回大会レジュメ

◆ ワークショップ

《コーパス研究のための初歩の統計：Excel を利用したカイ自乗検定》

(講師 中村 純作)

コーパスを検索する主な目的には、コンコーダンスを作成してある単語が実際にはどのような文脈で使用されているかを調べ、その語の語法的特徴を明らかにすることが挙げられます。これは、語法研究や辞書の編纂には欠かせない利用法ですが、それ以外にもコーパスの検索の重要な部分を「数える」作業が占めています。あるテキストの文体的特徴を捉えようとするとき、或いは複数のテキストを比較分析する際には、各々のテキストの単語や文の数を調べたり、単語の頻度表を作成することから分析が始まります。そこで、2つのテキストのある単語の頻度数を計算して、その間にいくらかの差が見られたとします。観察される差は選ばれたテキストの種類により大きな場合もあるし、ほとんど差がないような場合も考えられます。そこで、はたして観察された差が本当に意味のある差であるのか、それともほとんど無視してもよい日常普通に見られるような差であるのかを判断する必要が生じてきます。このような場合、データを集め、整理し、見やすい形で提示するための記述統計だけでなく、推測統計の「検定」の概念が必要とされる判断基準を与える有力な道具になります。

このワークショップでは、ある事象が特定の変数に依存しているのか、或いは独立したものであるかどうかを判断するためのカイ自乗検定をとりあげ、その原理と実際の計算法を紹介します。具体的には、前半で、ある単語の頻度分布がアメリカ英語とイギリス英語という英語の変異に依存したものであるかどうかを検定します。これは、斎藤俊雄他編『英語コーパス言語学：基礎と実践』第 5 章の冒頭で取り上げたものですが、紙数の制限で説明不足であった部分を補うと共に、今回は Microsoft Excel for Windows を使って実際の計算を行います。さらに、後半では、確率を示す副詞をいくつか取り上げ、その分布がジャンルに依存したものであるかどうかを検定します。

Excel の基礎知識（データの入力ができる程度）を前提としますが、数名の助手をお願いする予定ですので、全くの初心者でも受講可能です。

◆ 研究発表

● 古ノルド語神話文献資料コーパスの活用

(堀井 祐介)

北欧と呼ばれる地域において、中世の時代さまざまな形態の文学作品が生み出された。それらは古ノルド語で書かれており、現在北欧各地に写本資料として残っている。

古ノルド語による中世文学作品は、サガと呼ばれる散文作品とエッダ詩やスカルド詩と呼ばれる韻文作品とに分けられる。

今回の研究においては、北欧地域の古代ゲルマン人がキリスト教導入以前に持っていた世界観である北欧神話の文献資料分析の一方法として、その第一次資料とされる「エッダ詩集」、中世北欧を代表する文人であるスノッリ・ストゥルルソンの書いた「ギュルヴィの惑わし」、「ユングリング・サガ」を対象としてコーパスを編纂し、それに基づいてコンコーダンスを作成した。

実際の作業手順は以下の通りである。

1. 刊本に基づいて文献資料をテキストデータとしてコンピュータに入力。
 - ・ テキストを MS-DOS のテキストファイルとして入力。
 - ・ テキスト各行の先頭に位置情報として作品の略記号、 節番号、 行番号、 韻文・散文の区別、(神話詩・英雄詩の区別)をつける。(例：VSP 3.6.VG GYLFG 24.45.P)
 - ・ テキストに出て来る古西ノルド語に特有のアルファベットは他の記号(¥, %, \$, @, ^)と組み合わせて入力する。
 - ・ 分析対象とする 3 作品 (群) で約 17,000 行 (約 650KB) となった。
2. 大阪大学言語文化部言語工学部門の汎用機を用いて、入力したテキストデータのコンコーダンスを作成。
 - ・ 入力した MS-DOS のテキストファイルを汎用機に転送し、三木氏 (相山女学園大学助教授) 作成のプログラムを用いて KWIC コンコーダンスを作成。
 - ・ KWIC コンコーダンスをプリントアウトする。
3. コンコーダンスで動詞を調べる。
 - ・ プリントアウトした KWIC コンコーダンスで辞書に基づき品詞をチェックする。
4. 3. に基づき元のテキストデータ上の動詞に印をつける。
 - ・ KWIC コンコーダンス上で動詞とした単語について 1. で入力した MS-DOS テキストに \$ 印をつける。
5. データベースソフトに読み込めるようにテキストデータを加工。

・エディターソフト（VZ）のマクロ機能を用いて、*を付けた動詞，位置情報，前後の文脈をデータベースソフトに読み込めるように加工。

6. 位置情報とその動詞，その動詞の出て来るテキスト行を持つデータベース作成。

・*を付けた動詞，位置情報，前後の文脈をフィールドとする動詞データベースを作成。

7. 6. のデータベースに主語，目的語，意味，時制など個々の動詞についての情報を資料に忠実に加えて全部で 38 のフィールドからなる動詞データベースを完成。

・分析データの総数は 15, 426 例であった。

この動詞データベースに対して数値的な傾向や作品（群）別の分析，神々や英雄といった個別の主語を対象として分析を行ない，神々と英雄の行動，振る舞いなどをその他の存在と比較し，神々，英雄に特徴的と思われる動詞を抽出することを試みた。

● 英語テキストにおける母語話者と日本人英語学習者のトピック関連語の反復パターンの比較

（大谷 啓明）

非母語話者が書いたテキストは，仮に文法的，語用論的に明確な誤りを含まないものであっても，また個々の文のレベルでは「自然」な文が集まっても，全体としては母語話者の書いたテキストと容易に見分けがつかないことは少なくない。このような 'nativelike' selection (Pawley and Syder(1983))の実態の研究として，近年，従来 Error Analysis の枠組を越えた新たな視角から学習者コーパスなどを活用した研究が盛んになりつつある。今回の発表では特に同一トピックを与えて引き出した母語話者と学習者のテキストの比較を通して，特に文や節の境界を越えたトピック関連語（句）の反復パターンの分析を行い，この領域で母語話者の持つ一定のパターンを明るみに出したい。

具体的には，ある大学の学部入試の自由作文の課題 'Do you prefer to shop at large department stores or at small individual shops? Why?' という指示を与えて英語の母語話者（英・米）50人と日本の高校2年生の50人に100 words程度のテキストを書かせ，小規模なコーパスにして分析・比較した。このコーパスは規模的には小さいが，同一のトピックを持ち，長さも限定しサブトピックへの分岐が少ないので，特定のトピックと結びついた潜在的な（半）固定パターンの実態を自動的操作だけでなく手動的作業も併用して観察することができる。筆者が行った研究では様々なレベルでの分析を行いその相関関係を含めて考察したが，今回の発表では上述のように，トピック関連語（作文の指示として与えた

キーワード **department stores** と **small individual shops**) が母語話者と学習者のテキストの中でどのように「反復」されるかという問題に的を絞りたい。実際の反復は、全く同一形での反復や、数を変える(複数→単数)だけのものから、**small shops** のような要素の縮約や **small village shops, mom-and-pop store** のような一部や全部の置き換え(同義的なものもあるし意味の拡張・絞り込みを含む場合もある)、また代名詞などの **pro-form** など多岐にわたった。分析の結果、母語話者のトピック関連語の反復にも、テキスト作者個人のアドホックで自由な選択というよりは、むしろ一定の反復パターンが所与のトピックのもとで存在し選択の多くがその中で行われ、それが同時に談話の方向性の選択とも不可分に結びついているということが分かった。この結果、トピック関連語は文や節の境界内における統語規則に縛られた中での共起パターンの一部であるだけでなくその境界を越えたパターンの一部にもなっているということが分かった。

● 動詞形成接辞 **-ize, -ify, -ate** の付加における異形態の選択と音韻論的制約について
(五百藏 高浩)

本研究は、英語の派生接辞付加において生じる異形態の選択にはどのような制約が働いているのか、電子辞書から抽出したデータを検討し明らかにしていくことによって、理論的研究の基盤となる言語事実の整理を行うことを目的とする。従来より、英語の形態論研究において、接尾辞ごとのデータを収集するために **Walker's Rhyming Dictionary** といった逆引き辞典が不可欠であったが、その収録語数の規模は小さく、得られるサンプル数の少なさという難点から逃れることはできなかった。しかし、最近では、数十万語の収録語数を持つ辞書でさえ **CD-ROM** といった電子メディアの形式で入手可能となり、また、数多くの電子テキストが容易に利用できる状況が生まれてきている。ソフトウェアの検索機能を利用すれば、以前とは比べものにならないほど広範なデータを得ることが可能になってきた。そこで、本研究では、電子辞書およびその他のコーパスから抽出したデータを基に、動詞形成接尾辞 **-ize, -ify, -ate** の接辞付加に関わる特性に焦点を当て、考察を進めていくことにする。

形態素 **-IZE** は、**-ize** (e.g., **polarize**「分極する」, **idolize**「偶像視する」, **-tize** (e.g., **dramatize**「劇化する」, **aromatize**「...に芳香をつける」, **charismatize**「カリスマで(人に)影響を与える」), **-itize** (e.g., **sensitize**「抗原に敏感/過敏になる」, **austenitize**「(鋼)をオーステナイト化する」)? **Sir William C. Roberts-Austen** より???などのように、いくつかの異形態を持つことがよく知られている。さらには、**feminine+ize** → **feminize, *femininize** のように基体の一部が必ず刈り取られるものや、**saccharine+?ize??** → **saccharize, saccharinize** のように2つの異なった実現形が辞書に記載されているものもある。また、**-IZE** だけでなく **-IFY, -ATE** も同様に各々異形態を持ちつつ、それら3者にはそれぞれ棲み分けが見られ

るようである。しかし、その一方で、**dandify** と **dandyize**, **plasticize** と **plastify** のように、**doublets** として存在している語も少数ながら存在することもまた事実である。

こういった接辞の選択および個々の接辞の異形態の選択を決定付けている条件は一体何なのだろうか。本研究では特に、基体に含まれる音節数、分節音の脱落、強勢の移動といった音韻的特徴を調査することによって、上記 3 つの接尾辞による派生語形成のプロセスに共通の音韻論的制約が関わっていることを明らかにしていきたいと考えている。

◆シンポジウム

● 《Biber et al., Longman Grammar of Spoken and Written English を読む》 (司会 赤野 一郎)

昨年の夏に出版された、Biber et al., Longman Grammar of Spoken and Written English (以下 LGSWE) はコーパス言語学の成果を踏まえた初めての包括的な英文法書である。その規模は Quirk, et al. (1985) A Comprehensive Grammar of the English Language に匹敵し、コーパス言語学の手法によって明らかにされた知見が随所に見られ、文法およびコーパス言語学の研究者にとっての必読書である。

今回のシンポジウムでは、5 人 4 組の講師がこの文法書を精読しそれぞれの立場から検討を加える。最初に司会の赤野がコーパスに基づく英文法研究の流れを概観し、本書の目指す目標、使用されたコーパスのデザイン、分析方法、全体の構成を紹介する。深谷講師には文法論、特に体系文法の視点から、井上講師には語法研究と辞書学の視点から、須賀・鷹家講師には高校の英語教師の視点から、LGSWE を読んでいただき、その優れたところ、不満な点、従来の記述内容との相違や提示された新しい知見などについて、いくつかの文法項目 (grammatical features) を取り上げながら論じていただく予定である。

LGSWE をお持ちの方は、あらかじめざっと全体を、あるいは興味を引いた箇所に目を通していただければ幸いである。

● 「文法論の視点から」(深谷輝彦)

LGSWE の特徴といえば (1) コーパスから得られた CORPUS FINDINGS を DISCUSSION OF FINDINGS で機能主義的に解釈する、(2) CORPUS FINDINGS と言語使用域 (register) の相関を分析する、の二点をあげることができる。

本発表では、この機能主義的解釈ならびに言語使用域分析について、LGSWE と体系文法の対話を試みる。具体的には、動詞の意味分類と場面副詞類 (circumstance adverbials) (5章, 10章) に関して LGSWE の成果を概観した上で、体系文法側の意見を求める。特に、Matthiessen (1999) を参照しながら動詞の選択体系と場面副詞類の関連を論じるつもりである。

次に、言語使用域を重視する LGSWE ではアカデミック英語の情報密度が極めて高い、あるいは情報がぎっしり詰められているという指摘があちこちでなされている。この観察をもっとおもしろく発展させるために、体系文法の文法的メタファー (grammatical metaphor) という考え方を導入する。その結果として、なぜアカデミック英語が情報密度をあげたのかという疑問に少しでも答えたい。

LGSWE を共通点が多いハリデーの体系文法と比較することで、その長所、短所の一端を明確に示すという目標を達成する。

● 「語法研究・辞書学の視点から」(井上永幸)

コーパスに基づく文法書として Sinclair, J. et al. (ed.) (1990) Collins COBUILD English Grammar が登場して以来、後に Bank of English と呼ばれることになるコーパスを使った文法・語法書や教材が入れ代わり立ち代わり出版されてきた。本来であれば、これら一連の出版物はコーパスを使った画期的な文法書あるいは語法書としてもっともてはやされていてもおかしくないはずであるが、母語話者による直観的・主観的判断を排したかたくななまでのデータ第一主義が災いしてか、少なくとも日本では Quirk et al. (1985) に代わる存在とはなり得ていない。

LGSWE は、Quirk et al. (1985) を補う形で、LSWE Corpus に基づいて書かれた文法書である。数量的なデータを駆使しながらもただそれを提示するだけではなく、コーパス言語学によって培われた手法によってさまざまな言語事実を分析しようとする態度が貫かれている。本発表では、従来しばしば問題にされてきた事項 (たとえば主語と動詞の一致, that 節中の putative should など) に関する記述はどうなっているのか、従来の文献にない新しい発見はどのような点か、われわれ非母語話者の疑問にどれほど答えてくれるのか、といった点を語法研究と辞書学の観点から検討してゆきたい。

● 「英語教育の視点から」(須賀廣・鷹家秀史)

最初に、学習指導要領での文法指導の位置付けを確認し、英語教育理論の中での「文法の再評価」の動向をにらんで、今後の高校英語教育における文法指導のあり方、とりわけ、**grammar-based** な英語教育の可能性に触れる。

次いで鷹家が「英語を教える立場」から **LGSWE** がどのように読まれうるかという観点から、文法指導の枠組みを見直す可能性を **LGSWE** から抽出するつもりである。従来の文法指導では、ネイティブの直観に基づいた「学習英文法の体系」に基づき「文法の学習順序」と「指導項目の軽重」が考えられてきたが、英米の学習文法体系の消化・吸収の枠を出なかった面がある。**LGSWE** は、文法項目のジャンル別使用頻度の分布・文法項目の機能主義的な記述に関わる情報を提供してくれる。このことは、体系としての英文法理解ではなく、具体的な指導目標に基づく日本人英語教師の視点からの英文法指導の再構築の可能性を示唆しているように思われる。

それを受け須賀が高校の「英語学習者の立場」に身を置いて、**LGSWE** をどう生かすことができるかを具体的な記述を通じて提案するつもりである。特に、英語を「話し・書く」立場から、英語表現における文法項目の機能と選択性、及び話し言葉の文法について紹介したいと思う。このことは、コミュニケーション志向の英語学習に寄与する新たな文法学習の可能性を開くものと考えられる。